

高校体育教師への好感の程度とパフォーマンス遂行前の言葉かけに対する快／不快感情との関係

石倉 忠夫

本研究は、体育実技のパフォーマンス遂行前における体育教師からの言葉かけが生徒の快／不快感情に及ぼす影響について、体育教師に対する好感の程度と運動意欲、そしてパーソナリティとの関連性から検討した。大学生 955 名に高校体育授業時を回想させ、アンケート調査の回答を求めた。その結果、体育教師からの言葉かけに対する快／不快感情の反応は教師に対して好感を抱いていると快感情を持ちやすく、そして不快感情を持ちにくいという特徴が示された。

キーワード：言葉かけ、パフォーマンス遂行前、快／不快感情

1. 緒言

体育やスポーツ活動における指導者のメッセージ（言葉かけ）は活動者の快感情あるいは不快感情を喚起し、活動への動機づけに影響すると言えよう。大学生を対象に行った調査結果から、コーチング行動は大学生選手の内発的動機づけに関連し¹⁾、そして指導者から否定的な言葉をかけられると競技意欲を低下させることが報告されている²⁾。また、吉川・三宮³⁾は大学生に対して高校時代までの教師から受けた言葉かけについて回想させ調査したところ、子どもの学習意欲を低下させる教師の言葉かけが見受けられ、学習意欲を高める言葉かけには適切なタイミングと方法が必要であることを報告している。矢澤⁴⁾は子どものスポーツ競技において、指導者の言葉かけは競技に及ぼす影響力が非常に高く、競技成績を向上させるためには言葉かけの効果について検討することは重要であることを指摘している。これらの報告は指導者の言葉かけが活動者の動機づけに作用することを裏付けていると言える。

松井⁵⁾によると、注意や叱責の言葉がけであっ

ても、選手と指導者の親和的信頼関係が築けている場合には選手は肯定的に受け止める。さらに、指導者のフィードバック行動は、内発的動機づけに対して直接的に作用するというよりはむしろ、選手と指導者の親和的信頼関係を介し間接的に内発的動機づけに寄与していることを報告している。石倉⁶⁾は大学生を対象に高校で指導を受けた体育教師を回想させ、教師に対する好感の程度、パーソナリティ、運動意欲と教師の言葉かけに対する快／不快感情喚起との関連性について検討した。その結果、全体的にパーソナリティと運動意欲の状況が教師に対する好感の程度を介し、感情喚起に作用していることが明らかにされたことを報告している。また、矢澤⁷⁾は指導者と選手の間での言葉かけの言葉に対する認知の違いについて検討した。その結果、指導者は選手と同様に、選手を激励したり褒めたりするようなポジティブな言葉は選手にやる気を出させると認知し、一方ネガティブな言葉かけは選手のやる気をなくすと認知していた。しかし、言葉によっては、ポジティブな言葉に対して指導者が認知しているほど選手はポジティブ

に認知していないなど、指導者側と選手側の言葉かけに対する認知の仕方が異なっていたことを報告している。これらの報告は、生徒と教師の関係が生徒の内発的動機づけや教師からの言葉かけに対する感情喚起に作用すること、そして言葉によっては生徒と指導者の間に認知の仕方が異なることを示唆しているといえる。

Hanin⁸⁾は感情状態とスポーツ・パフォーマンス・レベルとの関連性を説明するIZOF (Individual Zone of Optimal Functioning) モデルを提唱している。このモデルは、最高のパフォーマンスが発揮できる精神状態は競技種目や選手によって異なることを主観的経験の構造に関連する要素(種類、内容、強度)と変動過程に関する要素(時間、文脈)によって階層的に構造化し、感情的反応を詳細に描写できるようにしている。このうち、内容要素は快楽の傾向(快-不快)とパフォーマンスにおける感情の衝撃(適切-機能不全)で構成されている。つまり、パフォーマンス遂行前の快-不快感情はその後のパフォーマンスの出来栄を左右する可能性が十分考えられると言えよう。

教師や指導者からの言葉かけに関する研究では、選手や生徒である活動者がパフォーマンス遂行後に与えられる言葉かけを対象に検討しているため、パフォーマンス遂行前の言葉かけについては検討の余地が残されている。そこで本研究は、石倉⁹⁾が明らかにしたパフォーマンス遂行前の快または不快感情喚起メッセージを用い、高校体育教師に対する好感の程度と運動意欲、そしてパーソナリティとの関係について検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

D大学生 955名(男性 494名、女性 461名)を

調査対象とした。なお、平均年齢は全体で19.7歳(標準偏差1.3歳)、男性19.9歳(標準偏差1.4歳)、女性19.5歳(標準偏差1.2歳)であった。

(2) 調査内容及び実施方法

調査は大学の講義時に無記名で実施した。

調査項目は調査対象者の年齢、性別、競技経験年数、高校3年時に教わった一人の体育教師を回想し、好感の程度、そしてその体育教師からパフォーマンス遂行前に言葉をかけられたと想定した場合の「快」「不快」の程度⁹⁾、運動意欲調査項目¹⁰⁾、そして日本語版Ten Item Personality Inventory (以下、TIPS-J)¹¹⁾であった。

高校体育教師に対する好感の程度については「好き」から「嫌い」を5件法で評価させた。

高校体育教師からの言葉かけメッセージに対する「快」「不快」の程度については、「快い」から「不快」の5件法にて回答を求めた。言葉かけメッセージは「運動前快感情喚起メッセージ」(以下、前快M)と「運動前不快感情喚起メッセージ」(以下、前不快M)に分けられ、それぞれ4メッセージで構成された。

運動意欲調査は6つの下位尺度(「運動有能感」「親和欲求」「活動欲求」「競争欲求」「運動不安」「運動価値感」)で構成されている。本研究では回答の負担を考慮し、石倉⁹⁾が確証的因子分析で明らかにした合計18項目の質問項目を取り上げ、各質問項目に対して「よくあてはまる」から「まったく当てはまらない」の4件法にて回答を求めた。

TIPS-Jは5つの下位尺度(「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」)で構成され、10項目の質問に対して「全く違うと思う」から「強くそう思う」までの7件法にて回答を求めた。

表 1 高校体育教師の性別と好感の程度

調査対象者		嫌いな方	どちらとも言えない	好きな方	
男性 ^b	男性教師	度数	76	100	300
		割合 (%)	16.0	21.0	63.0
	女性教師	度数	3	2	13
		割合 (%)	16.7	11.1	72.2
女性 ^c	男性教師	度数	32	55	169
		割合 (%)	12.5	21.5	66.0
	女性教師	度数	28	21	156
		割合 (%)	13.7	10.2	76.1
全体 ^a	男性教師	度数	108	155	469
		割合 (%)	14.8	21.2	64.1
	女性教師	度数	31	23	169
		割合 (%)	13.9	10.3	75.8

a: $\chi^2=14.41, df=2, p=.001$] 調整済み残差|2.0|以上

b: *n.s*

c: $\chi^2=10.48, df=2, p=.005$

(3) 分析方法

高校体育教師に対する好感の程度を「好き」「どちらかという好き」を「好きな方」、「嫌い」「どちらかという嫌いな方」を「嫌いな方」にまとめた。また、前快 M については「快い」5点～「不快」1点とし、前不快 M は「不快」5点～「快い」1点として得点を算出した。運動意欲調査と TIPS-J についてはそれぞれの得点算出方法に従って算出した^{9) 11)}。

統計解析を行うにあたり、IBM 社製 SPSS Statistics Ver24、そして Amos24.0.0 を用いた。有意水準を 5% 以下に設定した。

3. 結果

(1) 高校体育教師の性別と好感の程度について

高校体育教師の性別と好感の程度について調査対象者の性別毎にクロス集計を行い (表 1)、Pearson のカイ二乗検定を行った。

全体的に有意差が認められ ($\chi^2=14.41, df=2, p=.001$)、女性教師に対して、男性教師に比べ「好きな方」と答えた割合が多かった (対男性教師: 64.1%、対女性教師: 75.8%)。また、男性教師に

表 2 運動意欲調査および日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPS-J) における男女別得点

尺度	性別	平均値	標準偏差
[TIPS-J]			
外向性	男性	4.03	1.40
	女性	4.19	1.45
協調性	男性	4.81	1.18
	女性	4.91	1.08
勤勉性	男性	3.69	1.22
	女性	3.64	1.24
神経症傾向	男性	4.05	1.18
	女性	4.30	1.14
開放性	男性	4.32	1.17
	女性	3.99	1.17
[運動意欲調査]			
運動有能感	男性	8.06	2.25
	女性	6.38	2.32
親和欲求	男性	9.61	1.97
	女性	9.03	2.27
活動欲求	男性	7.94	2.31
	女性	6.54	2.50
競争欲求	男性	9.63	2.08
	女性	8.18	2.49
運動不安	男性	7.04	2.09
	女性	7.00	1.90
運動価値感	男性	10.16	1.67
	女性	9.97	1.86

□ $p < .001$

対しては、女性教師に比べて「どちらとも言えない」と答えた割合が多かった (対男性教師: 21.2%、対女性教師: 10.3%)。

調査対象者の女性において有意差が認められ ($\chi^2=10.48, df=2, p=.005$)、「どちらとも言えない」と回答した割合が男性教師 (21.5%) の方が女性教師 (10.2%) を上回った。一方、「好きな方」では女性教師が (76.1%) の方が男性教師 (66.0%) を上回った。

なお、調査対象者の男性において有意差は認められなかった。

(2) 性差について

運動意欲調査およびTIPS-Jの各下位尺度得点における性差について、t検定を用いて検討した。表2は各下位尺度における得点を男女別に示したものである。

運動意欲調査の「運動有能感」($t(953) = 11.36, p = .001$)、「親和欲求」($t(953) = 4.20, p = .001$)、「活動欲求」($t(953) = 8.96, p = .001$)、「競争欲求」($t(899.10) = 9.75, p = .001$)の各尺度において5%水準で有意差が認められ、男性の方が女性に比べて高得点であった。

TIPS-Jの「神経症傾向」($t(953) = -3.31, p = .001$)、「開放性」($t(953) = 4.33, p = .001$)の各尺度に有意差が認められた。「神経症傾向」は女性の方の得点が高く、「開放性」は男性の得点が高かった。

(3) 高校体育教師からの言葉かけメッセージに対する反応について

体育教師からの前快M／前不快Mの各得点について、性別×好感の程度による2要因分散分析を行った。図1はそれぞれのメッセージ得点と標準偏差を示している。

前快M得点において性別要因と好感の程度要因による主効果が有意であった(性別要因：

$df=1/949, f=6.33, p=.012$ ；好感の程度要因： $df=2/949, f=21.42, p=.001$)。多重比較の結果、女性の得点が高かった。また、「嫌いな方」の得点は「好きな方」「どちらとも言えない」の得点よりも低かった。交互作用は有意ではなかった。

前不快M得点においても性別要因と好感の程度要因による主効果が有意であった(性別要因： $df=1/949, f=38.18, p=.001$ ；好感の程度要因： $df=2/949, f=21.78, p=.001$)。多重比較の結果、女性の得点が高かった。また、「好きな方」の得点は「嫌いな方」「どちらとも言えない」の得点よりも低かった。交互作用は有意ではなかった。

(4) 高校体育教師に対する好感の程度とパーソナリティ、運動意欲、パフォーマンス遂行前快／不快感情喚起メッセージ得点との関係について

前快／不快M得点と高校体育教師に対する好感の程度、運動意欲およびパーソナリティの関連性を検討するために共分散構造分析を行った。また、前快／不快M得点、高校体育教師に対する好感の程度、運動意欲およびパーソナリティの一部に性差が認められたため、男女で影響するプロセスが異なる可能性がある。したがって、男女のパスを比べる意図から性別によ

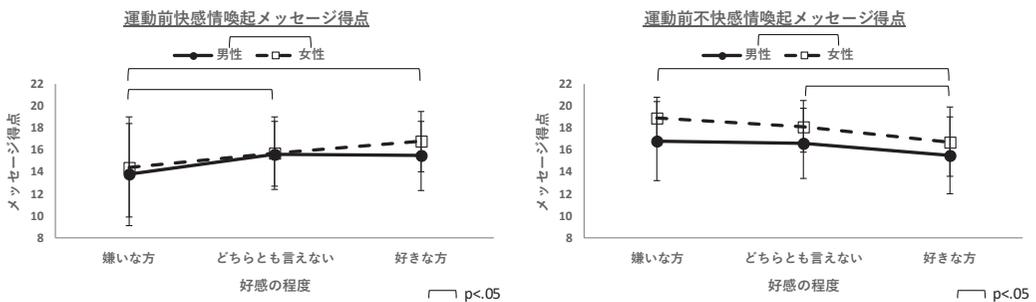


図1 運動前快／不快感情喚起メッセージ得点と高校体育教師に対する好感の程度

表 3-1 運動前快感情喚起メッセージにおけるパス図の標準化推定値

		男性		女性	
		標準化 推定値	確率	標準化 推定値	確率
活動欲求 <---	開放性	0.038	0.332	0.048	0.197
活動欲求 <---	勤勉性	0.129	0.001	0.113	0.004
競争欲求 <---	勤勉性	0.176	***	0.127	***
親和欲求 <---	協調性	0.148	***	0.180	***
親和欲求 <---	外向性	0.254	***	0.316	***
活動欲求 <---	外向性	0.164	***	0.282	***
競争欲求 <---	外向性	0.193	***	0.269	***
運動有能感 <---	開放性	0.015	0.706	0.066	0.054
運動有能感 <---	神経症傾向	-0.073	0.047	-0.052	0.101
運動有能感 <---	勤勉性	0.225	***	0.129	0.001
運動価値感 <---	協調性	0.133	***	0.220	***
運動有能感 <---	外向性	0.202	***	0.330	***
運動価値感 <---	外向性	0.139	0.002	0.159	***
Q1好き嫌い <---	神経症傾向	0.056	0.204	0.045	0.309
Q1好き嫌い <---	外向性	0.012	0.790	0.134	0.004
Q1好き嫌い <---	親和欲求	0.139	0.010	0.253	***
Q1好き嫌い <---	活動欲求	0.233	***	0.097	0.088
Q1好き嫌い <---	競争欲求	-0.153	0.006	-0.039	0.510
前快M <---	Q1好き嫌い	0.180	***	0.160	***
運動不安 <---	神経症傾向	0.181	***	0.150	***
運動不安 <---	勤勉性	-0.121	0.005	-0.146	***
運動不安 <---	協調性	-0.090	0.030	-0.083	0.055
運動不安 <---	外向性	-0.206	***	-0.201	***
前快M <---	協調性	0.131	0.002	0.124	0.002
前快M <---	運動有能感	-0.083	0.071	-0.086	0.054
前快M <---	親和欲求	0.103	0.074	0.218	***
前快M <---	運動価値感	0.163	0.002	0.281	***

前快M：運動前快感情喚起メッセージ ***p<.001

表 3-2 運動前快感情喚起メッセージにおけるパス図の相関係数

		男性		女性	
		標準化 推定値	確率	標準化 推定値	確率
神経症傾向 <-->	開放性	-0.104	0.021	-0.154	0.001
開放性 <-->	勤勉性	0.124	0.006	0.156	***
開放性 <-->	協調性	0.117	0.006	0.143	0.002
開放性 <-->	外向性	0.362	***	0.282	***
神経症傾向 <-->	勤勉性	-0.257	***	-0.178	***
神経症傾向 <-->	協調性	-0.146	0.001	-0.176	***
神経症傾向 <-->	外向性	-0.191	***	-0.148	0.001
勤勉性 <-->	協調性	0.054	0.222	0.190	***
勤勉性 <-->	外向性	0.215	***	0.083	0.072
協調性 <-->	外向性	0.000		0.000	
e4 <-->	e5	0.501	***	0.568	***
e3 <-->	e5	0.518	***	0.520	***
e3 <-->	e4	0.453	***	0.446	***
e7 <-->	e5	0.492	***	0.419	***
e7 <-->	e4	0.391	***	0.373	***
e7 <-->	e3	0.598	***	0.645	***
e2 <-->	e7	0.227	***	0.241	***
e2 <-->	e5	0.465	***	0.619	***
e2 <-->	e4	0.444	***	0.588	***
e2 <-->	e3	0.372	***	0.404	***
e6 <-->	e7	-0.106	0.020	-0.175	***
e6 <-->	e5	-0.165	***	-0.208	***
e6 <-->	e4	-0.119	0.009	-0.219	***
e6 <-->	e3	-0.171	***	-0.192	***
e6 <-->	e2	-0.115	0.011	-0.260	***

***p<.001

表 3-3 運動前快感情喚起メッセージにおけるパス図の重相関係数の平方

	標準化推定値	
	男性	女性
競争欲求	0.083	0.094
活動欲求	0.060	0.109
親和欲求	0.086	0.132
運動価値感	0.037	0.073
運動有能感	0.134	0.163
Q1好き嫌い	0.070	0.126
運動不安	0.140	0.122
前快M	0.120	0.287

前快M：運動前快感情喚起メッセージ

る多母集団の分析を行った。

①パフォーマンス遂行前快感情喚起メッセージについて

標準化推定値、重相関係数の平方、修正指数（修正指数の閾値は4）を算出するように設定し、推定値を算出した。モデル適合度を確認し、推定値と修正指数の算出結果をもとにパス図を修正した。その結果、モデル適合度指数の値は $\chi^2=42.08$, $df=27$, $p=.032$, $GFI=.993$, $AGFI=.977$, $CFI=.995$, $RMSEA=.024$, $AIC=170.078$ を示し、当てはまりの良いモデルと判断された。

性別による多母集団の分析を行ったところ、表 3-1～表 3-3 の結果が得られた。

②パフォーマンス遂行前不快感情喚起メッセージについて

モデル適合度を確認し、推定値と修正指数の算出結果をもとにパス図を修正した。その結果、 $\chi^2=36.05$, $df=28$, $p=.141$, $GFI=.994$, $AGFI=.981$, $CFI=.997$, $RMSEA=.017$, $AIC=162.051$ を示し、当てはまりの良いモデルと判断された。

表 4-1 運動前不快感情喚起メッセージにおけるパス図の標準化推定値

		男性		女性	
		標準化推定値	確率	標準化推定値	確率
活動欲求 <--> 開放性	0.038	0.332	0.048	0.197	
活動欲求 <--> 勤勉性	0.129	0.001	0.113	0.004	
競争欲求 <--> 勤勉性	0.176	***	0.127	***	
親和欲求 <--> 協調性	0.148	***	0.180	***	
親和欲求 <--> 外向性	0.254	***	0.316	***	
活動欲求 <--> 外向性	0.164	***	0.282	***	
競争欲求 <--> 外向性	0.193	***	0.269	***	
運動有能感 <--> 開放性	0.015	0.706	0.066	0.054	
運動有能感 <--> 神経症傾向	-0.073	0.047	-0.052	0.101	
運動有能感 <--> 勤勉性	0.225	***	0.129	0.001	
運動有能感 <--> 外向性	0.202	***	0.330	***	
Q1好き嫌い <--> 神経症傾向	0.056	0.204	0.045	0.309	
Q1好き嫌い <--> 外向性	0.012	0.790	0.134	0.004	
Q1好き嫌い <--> 親和欲求	0.139	0.010	0.253	***	
Q1好き嫌い <--> 活動欲求	0.233	***	0.097	0.088	
Q1好き嫌い <--> 競争欲求	-0.153	0.006	-0.039	0.510	
前不快M <--> Q1好き嫌い	-0.181	***	-0.187	***	
運動不安 <--> 神経症傾向	0.181	***	0.150	***	
運動不安 <--> 勤勉性	-0.121	0.005	-0.146	***	
運動不安 <--> 協調性	-0.090	0.030	-0.083	0.055	
運動価値感 <--> 協調性	0.133	***	0.220	***	
運動不安 <--> 外向性	-0.206	***	-0.201	***	
運動価値感 <--> 外向性	0.139	0.002	0.159	***	
前不快M <--> 協調性	0.088	0.041	0.051	0.227	
前不快M <--> 運動有能感	-0.054	0.273	-0.176	0.001	
前不快M <--> 活動欲求	-0.114	0.025	-0.183	0.001	

前不快M：運動前不快感情喚起メッセージ ***p<.001

表 4-2 運動前不快感情喚起メッセージにおけるパス図の相関係数

		男性		女性	
		標準化推定値	確率	標準化推定値	確率
神経症傾向 <--> 開放性	-0.104	0.021	-0.154	0.001	
開放性 <--> 勤勉性	0.124	0.006	0.156	***	
開放性 <--> 協調性	0.117	0.006	0.143	0.002	
開放性 <--> 外向性	0.362	***	0.282	***	
神経症傾向 <--> 勤勉性	-0.257	***	-0.178	***	
神経症傾向 <--> 協調性	-0.146	0.001	-0.176	***	
神経症傾向 <--> 外向性	-0.191	***	-0.148	0.001	
勤勉性 <--> 協調性	0.054	0.222	0.190	***	
勤勉性 <--> 外向性	0.215	***	0.083	0.072	
協調性 <--> 外向性	0.000	0.000	0.000	***	
e4 <--> e5	0.501	***	0.568	***	
e3 <--> e5	0.518	***	0.520	***	
e3 <--> e4	0.453	***	0.446	***	
e2 <--> e5	0.465	***	0.619	***	
e2 <--> e4	0.444	***	0.588	***	
e2 <--> e3	0.372	***	0.404	***	
e6 <--> e7	-0.106	0.020	-0.175	***	
e7 <--> e5	0.492	***	0.419	***	
e7 <--> e4	0.391	***	0.373	***	
e7 <--> e3	0.598	***	0.645	***	
e7 <--> e2	0.227	***	0.241	***	
e6 <--> e5	-0.165	***	-0.208	***	
e6 <--> e4	-0.119	0.009	-0.219	***	
e6 <--> e3	-0.171	***	-0.192	***	
e6 <--> e2	-0.115	0.011	-0.260	***	

***p<.001

表 4-3 運動前不快感情喚起メッセージにおけるパス図の重相関係数の平方

	標準化推定値	
	男性	女性
競争欲求	0.083	0.094
活動欲求	0.060	0.109
親和欲求	0.086	0.132
運動有能感	0.134	0.163
Q1好き嫌い	0.070	0.126
運動価値感	0.037	0.073
運動不安	0.140	0.122
前不快M	0.072	0.171

前不快M：運動前不快感情喚起メッセージ

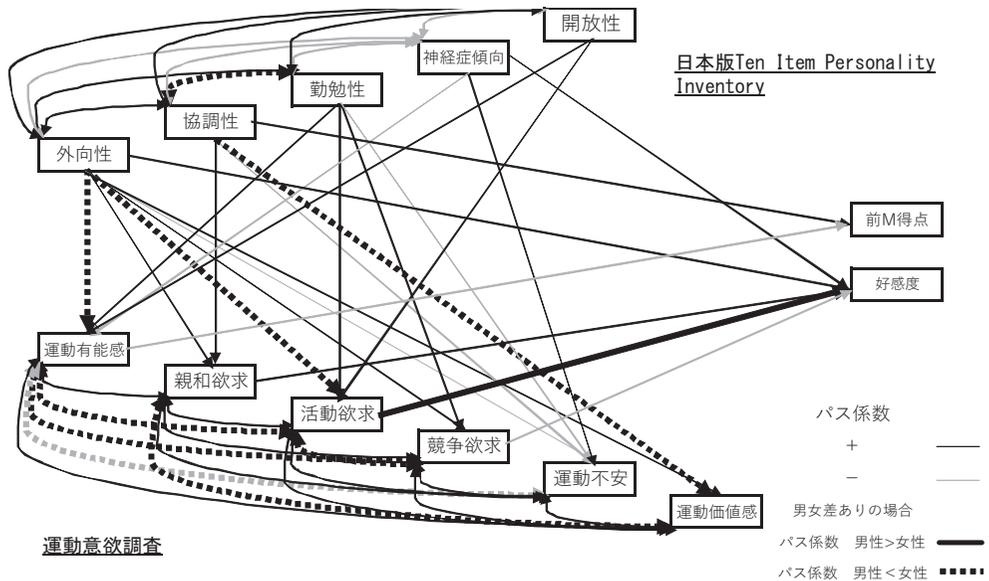
性別による多母集団の分析を行ったところ、表 4-1 ~ 4-3 の結果が得られた。

③ 共通パス

図 2 は共通して確認できたパスをまとめたものである。TIPS-J の下位尺度からメッセージ得点につながる直接的なパスは「協調性」尺度のみであった。また、運動意欲では「運動有能感」尺度のみ直接的なパス（マイナス）が示された。指導者に対する好感の程度（パス図中「好感度」）からパフォーマンス遂行前感情喚起メッセージ得点（パス図中「前 M 得点」）につながるパスは共通して見られなかった。

運動意欲の各下位尺度と TIPS-J の下位尺度の間に次に上げる関係が示された：「運動有能感」に対して「外向性（パス係数は女性の方が有意に大きい）」「勤勉性」「神経症傾向（負のパス係数）」「開放性」。「親和欲求」に対して「外向性」

「協調性」。「活動欲求」に対して「外向性（パス係数は女性の方が有意に大きい）」「勤勉性」「開放性」。「競争欲求」に対して「外向性」「勤勉性」。「運動不安」に対して「外向性（負のパス係数）」



前快M : $\chi^2=42.08$, $df=27$, $p=.032$, $GFI=.993$, $AGFI=.977$, $CFI=.995$, $RMSEA=.024$, $AIC=170.08$

前不快M : $\chi^2=36.05$, $df=28$, $p=.141$, $GFI=.994$, $AGFI=.981$, $CFI=.997$, $RMSEA=.017$, $AIC=162.05$

図2 共分散構造分析で確認された共通パス

「協調性（負のパス係数）」「勤勉性（負のパス係数）」「神経症傾向」。そして「運動価値感」に対して「外向性」「協調性（パス係数は女性の方が有意に大きい）」。

指導者に対する好感の程度（パス図中「好感度」）に対して「神経症傾向」「外向性」「親和欲求」「活動欲求（パス係数は男性の方が有意に大きい）」「競争欲求（負のパス係数）」に関連性が示された。

④各メッセージのパス図

前快M（図3）において、「好感度」と「前快M得点」との間に正のパス係数が示された。そして、運動意欲における「親和欲求」「運動価値感」の両尺度が前快M得点と正のパス係数を示した。

一方、前不快M（図4）においては、「好感度」と「前不快M得点」の間に負のパス係数が示さ

れたほか、運動意欲の「活動欲求」尺度と「前不快M得点」の間に負のパス係数が示された。

4. 考察

本研究は、大学生を対象とし高校3年時の体育教師を回想させ、体育実技のパフォーマンス遂行前における体育教師からの言葉かけが生徒の快／不快感情に及ぼす影響について体育教師に対する好感の程度と運動意欲、そしてパーソナリティとの関連性から検討した。調査の結果から以下の特徴が示されたと言える。

①男性体育教師よりも女性体育教師が好感をもたれている。また、女子生徒は同性である女性体育教師に対して好感を持っている。松井¹²⁾は高校生の男子は女子よりも指導者に対する親和的信頼感が低いと報告している。従って、女性における女性指導者に対する好感の程度が高

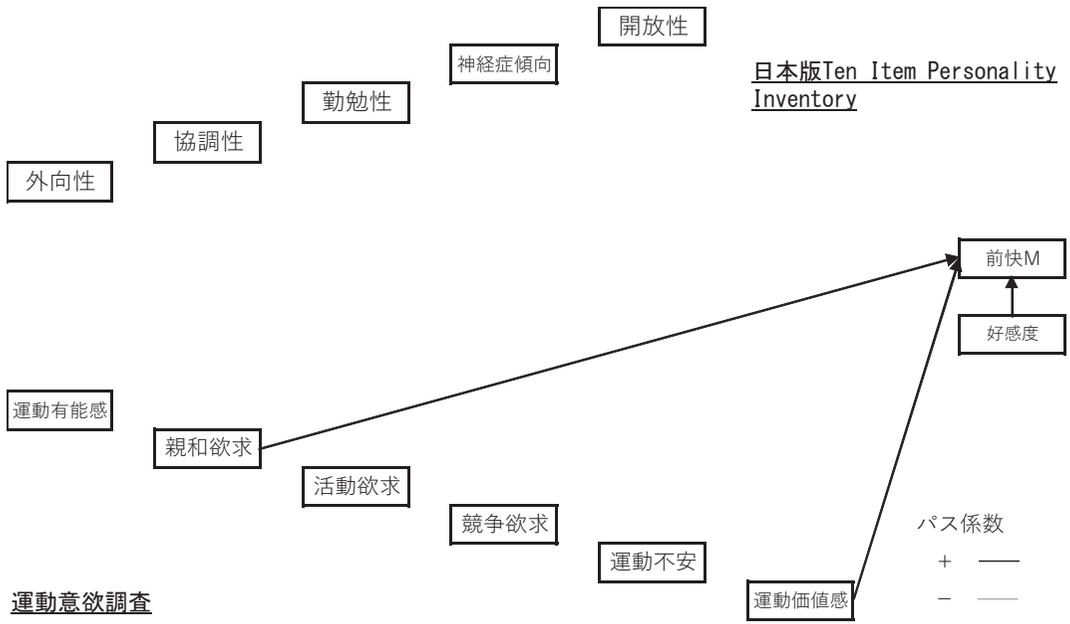


図 3 運動前快感情喚起メッセージで確認されたパス

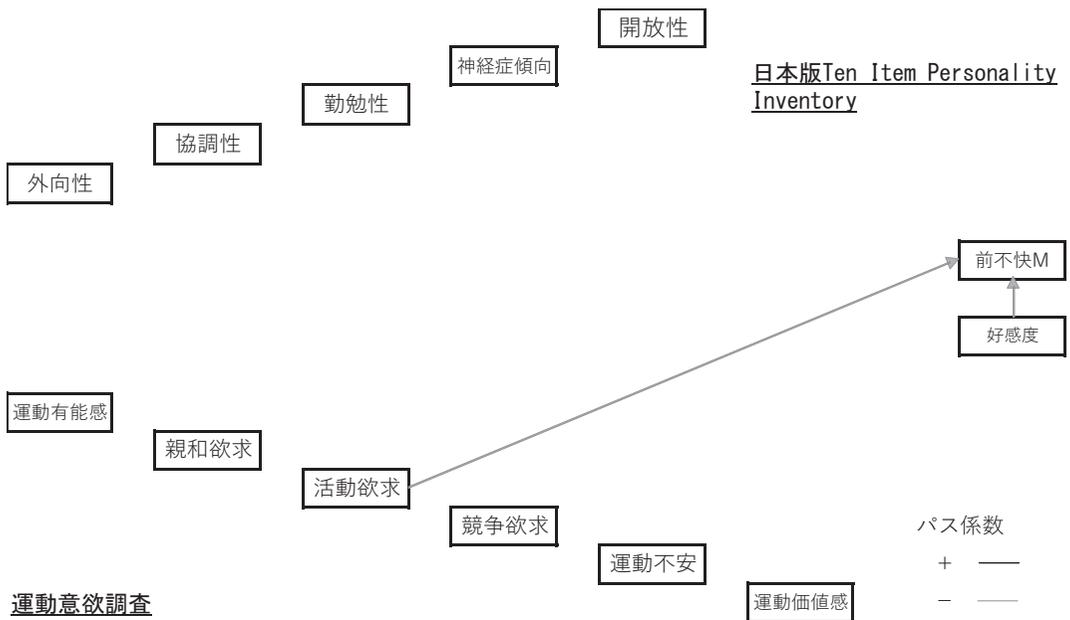


図 4 運動前不快感情喚起メッセージで確認されたパス

かったという本研究で得られた結果は、松井¹²⁾の結果を支持するものである。

②大学生の運動意欲における「運動有能感」「親和欲求」「活動欲求」「競争欲求」は男子学生の方が高い。またパーソナリティについて、男性は「開放性」が高く、女性は「神経症傾向」が高いという特徴が示された。

運動意欲とパーソナリティとの関連性について検討した結果から、「外向性」の高い人ほど運動意欲における運動不安以外の5つの下位尺度の得点が高く、運動不安は低いという特徴が示された。つまり、外向性が高いほど運動意欲が高いということになる。また、勤勉な人は運動有能感、活動欲求、競争欲求が高く、運動不安が低い。協調性の高い人は親和欲求、運動価値感が高く、運動不安の傾向が低い。開放性の高い人は運動有能感、活動欲求が高い。そして、神経症傾向の高い人は運動有能感が低く、運動不安傾向が高いという特徴が見られた。

高校体育教師に対する好感の程度と運動意欲、パーソナリティとの関係においては、「神経症傾向」「外向性」「親和欲求」「活動欲求」が高く、「競争欲求」が低いと教師に対して好感を持っているという特徴が示された。

③パフォーマンス遂行前のメッセージに対し、女性は男性よりも運動前の快と不快感情喚起メッセージの両得点において高かったため、女性は男性よりも教師からの言葉かけによく反応すると言えよう。この結果は、女性は男性よりも不快感情を喚起する運動前メッセージに対し不快に感じるという石倉⁹⁾の報告と、女性は男性よりも成功時の指導者からのメッセージと失敗時の不快感情を喚起するメッセージに反応するという石倉⁶⁾の報告を支持するものであった。したがって、女性は男性よりも指導者からのメッセージに反応しやすいと言える。

④体育教師からの言葉かけに対する快／不快感情の反応は、好感度とパフォーマンス遂行前感情喚起メッセージ得点との間に快感情喚起メッセージ得点では正のパス係数が、不快感情喚起メッセージ得点では負のパス係数が示された。したがって、教師に対して好感を抱いていると、快感情を持ちやすく、不快感情を持ちにくいと言えよう。また、TIPS-Jの下位尺度からメッセージ得点につながる直接的なパスは「協調性」尺度のみであったため、協調性のパーソナリティ傾向が強くなるほど感情喚起メッセージに快感情喚起メッセージに対しては快く、不快感情喚起メッセージに対しては不快に感じやすいという特徴が示されたと言えよう。また、運動意欲の「運動有能感」とメッセージ得点との間に負のパス係数が示されたため、運動有能感が低い者ほどメッセージに対して感情が喚起されやすい特徴が示された。石倉⁶⁾はパフォーマンス遂行後の言葉かけについて検討した結果、パーソナリティと運動意欲の状況が教師に対する好感の程度を介し、感情喚起に作用していることを報告している。また、矢澤⁴⁾は単に指導者からの言葉かけが肯定的表現か否定的表現かで分けるのではなく、その言葉かけを受け取った理由を選手がどのように認知するのか、指導者との人間関係がどうであるのかなど文脈に基づいて言葉かけの効果を理解していくことが重要であることを指摘している。松井¹²⁾は指導者の言動に対して、競技者がどのように認知するのかを検討する際、競技者の認知を左右する要因として、競技者と指導者がどのような関係にあるかということが大きな要因の一つである可能性が考えられることを示唆している。したがって、本研究の結果から、体育教師に対する好感の程度がパフォーマンス遂行前の言葉かけに対する快／不快感情に影響する大きな要因として考え

られるが、活動者の「協調性」の高いパーソナリティの持ち主や「運動有能感」の低い者ほど感情喚起に作用することが示唆されたと言えよう。また、パフォーマンス遂行前の快または不快感情を喚起するそれぞれのメッセージに対し、「親和欲求」と「運動価値感」の高い者は快感がより喚起され、「活動欲求」の低い者は不快感情がより喚起されるという特徴も示された。

引用・参考文献

- 1) Amorose, A.I. and Horn, T.S. (2000) Intrinsic Motivation: Relationships with collegiate athletes' gender, scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 22, pp63-84.
- 2) 下妻綾子・三輪康廣・阿部和雄 (1999) スポーツ選手における競技意欲の低下に関する研究. *日本体育大学紀要*, 28 巻 2 号, pp181-190.
- 3) 吉川正剛・三宮真智子 (2007) 生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響. *鳴門教育大学情報教育ジャーナル*, 4, pp19-27.
- 4) 矢澤久史 (2007) 指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響. *東海学院大学紀要*, 1, pp211-217.
- 5) 松井幸太 (2014) 高校運動部活動における生徒の内発的動機づけ-指導者のフィードバック行動および生徒と指導者の関係に対する生徒の認知からの検討-. *スポーツ心理学研究*, 第 41 巻第 1 号, pp51-63.
- 6) 石倉忠夫 (2018) 高校体育実技における教師からの言葉かけは生徒の好感の程度によって快/不快感情喚起に影響するののか?—大学生の回顧によるアンケート調査に基づいて—. *京都文教短期大学研究紀要*, 第 56 集, pp103-115.
- 7) 矢澤久史 (2017) 言葉かけがやる気に及ぼす効果に関する指導者と選手の認知の違い. *名古屋短期大学研究紀要*, 第 55 号, pp29-37.
- 8) Hanin, Y.L. (2000) Individual zones of optimal functioning (IZOF) model: Emotions-performance relationships in sports. In: Hanin, Y.L. (Ed.), *Emotions in sport*. Human Kinetics, pp65-89.
- 9) 石倉忠夫 (2018) パフォーマンス遂行前における体育教師からの快/不快感情を喚起するメッセージの影響. *同志社スポーツ健康科学*, 第 10 号, pp1-8.
- 10) 猪俣公宏・猪俣春世 (1989) 老年期における運動意欲の測定に関する研究. 昭和 63 年度文部省科学研究費 (一般研究 C) 研究成果報告書.
- 11) 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012) 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIP-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 第 21 巻第 1 号, pp40-52.
- 12) 松井幸太 (2014) 高校運動部活動における生徒の内発的動機づけと指導者のフィードバック行動および生徒と指導者の関係-性別・学年・競技水準・競技種目からの検討-. *聖泉論叢*, 22 号, pp71 - 83.

【付記】本稿は [MEXT 科研費 JP17K01651](#) 研究課題「運動遂行前の情動喚起メッセージ聴取が運動学習に及ぼす影響」の助成を受けたものです。